

摂丹型民家の破風にみる現代的变化の一例

ひとはく地域研究員 山崎 敏昭

1. はじめに

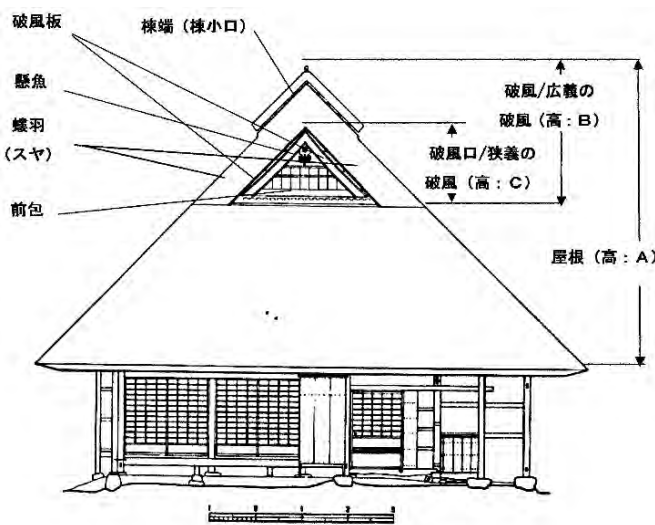
摂丹型民家は、近畿地方の旧国摂津北西部、丹波、山城地域に分布する妻入り片土間型式の民家類型である。この民家型式は近畿周辺部の他の妻入民家と異なり、広縁、座敷等の「ハレ」の接待空間を前面に配置し、格式を重視して成立した、社会性・階層性をあらわす類型として評価される。特に入母屋屋根の正面に見せる破風は、住人の格式を表象するものとして重視されている。

1970年代に摂丹型民家の類型が規定されて以降、分布圏では多くの調査成果が蓄積されているが、本類型の特徴とされる破風の全体像が十分に解明されているとは言い難い。今回の検討は、摂丹型民家の類型の特徴である格式に関わる装置である破風について、指定文化財や写真に記録された歴史的な類型をはじめ、現代の破風の類型を俯瞰し、どのように変化を遂げているのかを確認することを目的とする。

2. 摂丹型民家の破風に関する既往研究

京都府北部・丹波地域の摂丹型民家の分布圏をはじめとする草葺民家の破風は、石原憲治氏や今和次郎氏、藤田元春氏により、大正・昭和戦前期の民家研究の黎明期から注目され紹介されていた¹⁾。藤田氏は、『日本民家史』において、「丹波でも破風は村での家格標章であった」とし、「家格を表象するために美しさを競っていた」と紹介する²⁾。今和次郎氏は、丹波地方で採集したと言うスケッチを示し、形式分類を試みた³⁾。戦後には川島宙次氏がスケッチにより多くの事例を紹介した⁴⁾。

1970年代になり、永井規男氏によって同民家の破風は、類型を特徴づける装置としての評価が確立した。永井氏は、口丹波地域の摂丹型民家に伝承される、中世以来の国人や名主、土豪といった、破風を免許された家格を表象する装置であったと指摘する⁵⁾。文献史料学の研究者秋山国三氏は、口丹波地域の近世村落の家格制度を検討し、村落内の家格表象として家構が位置づけられ、宮座・株毎に規定されていたことを明らかにし、



(重要文化財旧岡花家住宅修理前立面図に加筆)

Fig1. 破風の名称

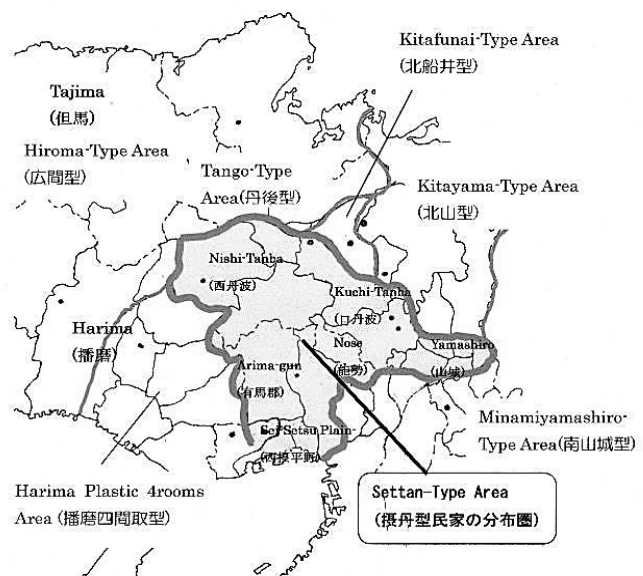


Fig2. 摂丹型民家の分布圏

望観が容易な屋根の「破風」は特に重視された家格表象の装置であったと指摘した⁶⁾。以上のように今和次郎氏が破風の分類を試みて以降、類型化や現代的变化に言及した研究はみられない。

3. 対象資料・研究の方法

検討資料として、民家集落調査報告書、解体修理報告書、自治体史等に記録された事例、国・府・県、自治体の指定・登録文化財の他、現代の破風については、分布圏の各地域で取材した事例を対象とした。方法は、

- 1) 調査記録等をもとに撰丹型民家の破風の用語を整理・定義し、類型の設定を試みた。
- 2) 設定した類型に基づき、現代の破風の仕様内容について検討した。

として、そのうえで撰丹型民家の特徴である破風の歴史的継続性、現代的なあり方について考察を試みた。

4. 用語の整理と歴史的に認められる基本形態

破風は、切妻屋根や入母屋屋根等の妻側の端面を覆う板（破風板）と妻壁の装飾を兼ねる設えである。草葺民家では、入母屋屋根の妻側の屋根頂部の三角形の開口部を含む⁷⁾。各部材の名称は、寺社建築の破風を基本としており、煙出しを兼ね備える開口部は「破風口」と呼ばれる。

本稿では、調査記録と指定文化財にみる破風について、破風板の有無、破風口の型式、素材・仕様、装飾法について以下に定義し分類した。

破風板 縁とも呼ばれる。 ※スヤ 破風板の外縁部に沿った屋根の虻羽部分 (Fig.1 参照)
破風口 閉塞 (全面、通気孔 (方形・菱形・円・その他)、上半開放、下半開放、開放の 4 種

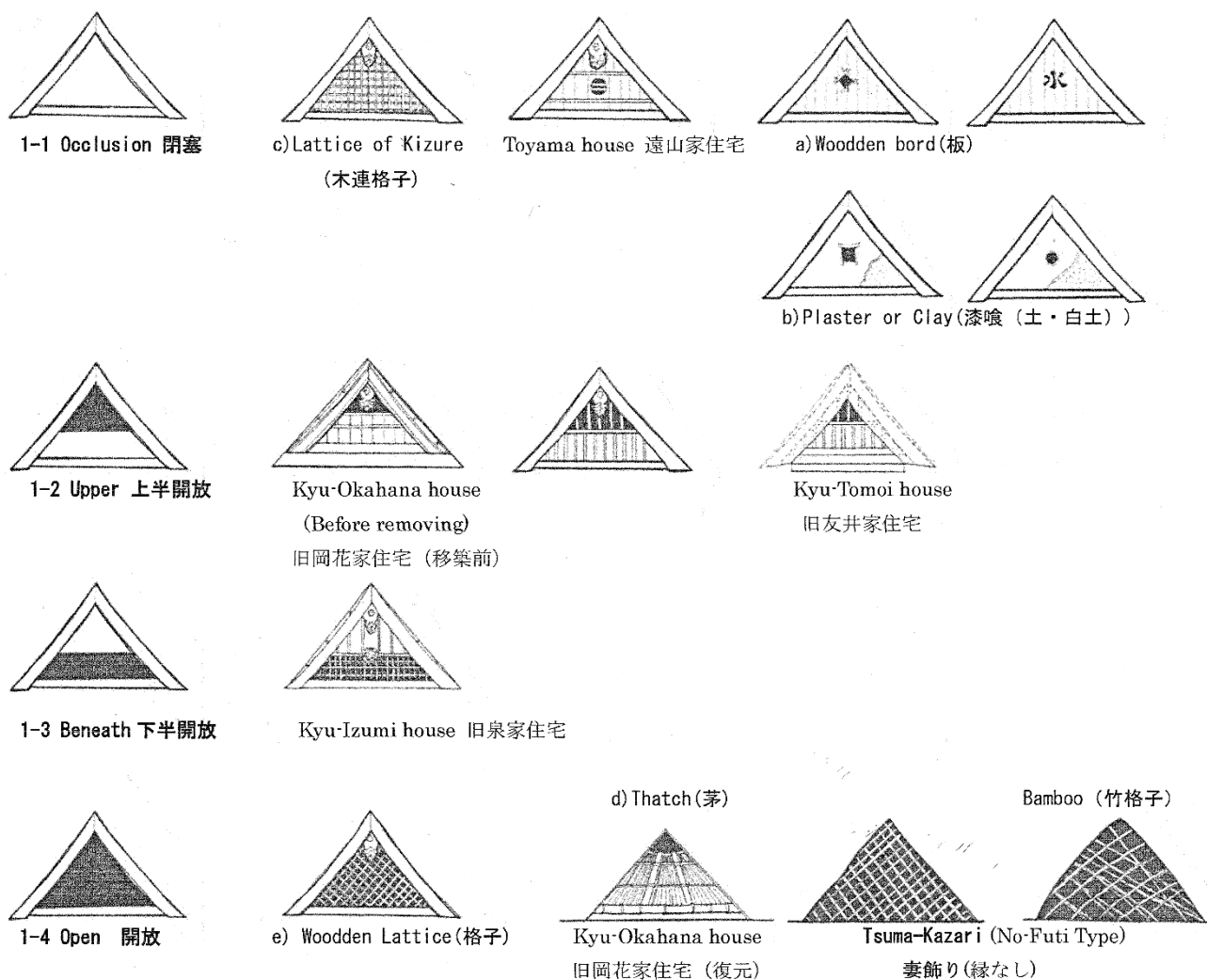


Fig.3 The pattern for Design of Hafu in Settan type farmhouses.: 撰丹型民家の破風の型式一覧 (模式図)

5. 現代の破風



破風は、屋根の上の装飾材であるため、屋根の葺き替えの際に更新される。そのため、文化財建造物であっても、創建当初の破風を保持しているとは言えない。また、Fig.3 に示した歴史的な形態には、現在は継承されていない型式もみられる。この変化を加速させた最も大きな要因は、1970年代頃から増加した茅葺き屋根をトタンや各種鋼板で覆う形式への変化である。この方法は、原形の茅葺き屋根を覆い込むため、破風もひと回り大きく拡張される (Photo. 1)。

Photo.1 茅葺から鋼板屋根への改築 (『三田市史』第9巻民俗編) より



Photo.2 口丹波地域(京都府亀岡市)の事例:左/重文遠山家住宅の現状



Photo.3 西丹波地域(兵庫県丹波篠山市)の事例:左/県立公園保存民家・旧中道家住宅



Photo.4 北摂津地域(大阪府豊能郡能勢町、兵庫県川辺郡猪名川町)の事例



Photo.5 西摂津(旧有馬郡域)地域(兵庫県神戸市北区唐櫃地区)の事例

鋼板覆いに変化する際に、「スヤ」とも呼ばれた入母屋屋根の妻側端面の虻羽をも破風に取り込む事例も見られ、本来は破風の「縁」であった破風板が、鋼板によって大きく強調される事例も増加する傾向が認められる。

現代の撰丹型民家は茅葺屋根から鋼板覆いに変化していることに伴い、破風の素材は木製が少なくなり、金属（鋼板）製へと変化している。形式については、全面閉塞または上半開放の2種類に大別することができる。意匠については、鋼板製破風に棧等の形を意識した塗装の塗分けが行なわれる事例がみられる。また、「縁」に相当する破風板部分を白色に塗り分ける事例もみられる。破風板部分を白色に塗分ける例では、虻羽をも破風に取り込み拡張した部分についても白色に塗分け、破風部分を大きく強調する形式も認められる。

形式毎の分布状況は、鋼板製破風の棧等の部材の形を塗分ける事例、「縁」に相当する破風板部分を白色で表現する事例ともに分布圏の全域で認められる。ただ、虻羽部分にまで拡張した鋼板の破風板についても白色に塗分け強調する形式については、特に西摂津地域北部（神戸市北区、三田市域）から西丹波地域（丹波篠山市域の西部）に事例が多く認められる（Photo. 5）。

6. まとめ

今回の検討では、撰丹型民家の破風にみる現代的变化について、以下の点が認められた。

- 1) 茅葺屋根から鋼板覆いに変化していることに伴い、破風の素材は木製から、金属（鋼板）製への変化が認められた。形式については、全面閉塞または上半開放の2つに大別することができた。
- 2) 意匠については、鋼板製破風の「縁」に相当する破風板部分を白色に塗分ける事例もみられた。この例では、虻羽をも取込み拡張した部分についても白色に塗分け、破風が強調される形式も認められた。
- 3) 分布状況では、本来の破風板に加え虻羽部分にまで拡張した部分を白色に塗分け強調する形式は、西摂津地域北部（神戸市北区、三田市域）から西丹波地域（丹波篠山市域の西部）に多く認められた。

筆者はかつて、撰丹型民家の破風について、悉皆調査で記録された事例や指定文化財等の保存民家の例を検討し、分布圏東部の口丹波・北摂津能勢地域である大阪府域・京都府域に強調する傾向が顕著である事を指摘した⁹⁾。現代の虻羽部分的にまで拡張した破風を白色に塗り分け強調する事例が、同民家の分布圏の西縁部である兵庫県域の西摂津地域北部から西丹波地域に顕著であるという結果は、鋼板覆い屋根が普及し始めた1970年代以前と現代では、破風を強調する傾向が分布圏の東西で逆転していることを示す。この点は、撰丹型民家の特徴である破風の強調方法について、鋼板覆い屋根への転換を契機に生じた変化であると考えられる。今後も継続して検討して行きたい。

【引用・参考文献】

- 1) 石原憲治（1934）『日本農民建築』第六輯
 - 2) 藤田元春（1937）『日本民家史』（増補版）刀江書院
 - 3) 今和次郎（1943）「五四、丹波綾部の家」『改稿日本の民家』相模書房
 - 4) 川島宙二（1983）『民家のデザイン』相模書房
 - 5) 永井規男（1977.01）「撰丹型民家の形成について」『日本建築学会論文報告集』第251号：119-128
 - 6) 秋山国三（1960）「家格とその指標について—口丹波地方の場合—」『同志社大学人文科学研究紀要』3、1-44
 - 7) 「つまかざり」：建築大辞典 第2版第3刷，彰国社，1997，pp.1102、安藤邦弘「はふ 破風」：日本民俗大辞典(下)，吉川弘文館，2000，pp.386、「はふ（破風）」：建築大辞典 第2版，彰国社 1993，pp.1347、「ハフ 破風」：日本民家語彙解説辞典，日本建築学会民家語彙集録部会，日外アソシエーツ，1993，pp.614
 - 8) 山崎敏昭（2019.06）「9007 撰丹型民家における破風の類型に関する研究—記録された破風にみる近世村落内の階層表現について・撰丹型民家における破風考（3）—」『日本建築学会近畿支部研究報告集』第59号計画系：pp.465-468（プレゼン）
 - 9) 山崎敏昭・黒田龍二（2014.06）「9021 撰丹型民家における破風考」『日本建築学会近畿支部研究報告集』第54号：pp.749-752
- 山崎敏昭（2016.06）「9005 撰丹型民家の分布圏における破風の大きさ—撰丹型民家における破風考（2）—」『日本建築学会近畿支部研究報告集』第56号：pp.557-560

（2024.01.28 出稿）